発達のなかの煌き

第Ⅱ部

発達的共感が創り出す実践
——歴史に学び、今をみつめ、未来を創る

白石正久　白石恵理子

しらいし　まさひさ／1957年、群馬県生まれ。小児科病院の発達相談員などを経て、現在龍谷大学名誉教授。

しらいし　えりこ／1960年、福井県生まれ。大津市発達相談員などを経て、現在滋賀大学教育学部教授。

第6回　自然、生命、発達

『虔十公園林』

かつて本誌の「発達をはぐくむ目と心」という連載（全障研出版部から単行本化）で、宮澤賢治の『虔十公園林』を紹介しました。

虔十は縄の帯をしめて、笑いながら杜や畑をゆっくり歩いているのでした。雨のなかの青い薮を見ては目をパチパチさせ、青空を翔ける鷹を見つけては跳ね上がって手を叩き、風が吹いてブナの葉がチラチラ光ると、嬉しくて一人で笑えて仕方ないのでした。虔十を、村の子どもは笑いました。

そんな虔十が、「お母、おらさ杉苗七百本、買って呉ろ」と言いました。お父は、「買ってやれ、買ってやれ、虔十ぁ今まで何一つだて頼んだごとぁ無ぃがったもの」と言いました。虔十は兄さんと杉を植えましたが、土が悪くてなかなか育ちません。村のみんなは馬鹿だと笑いましたが、枝打ちもして育てた杉は、明るく光さす並木道のようになりました。

賑やかな声が聞こえたので虔十が行ってみると、子どもたちが集って杉の列の間を楽しそうに行進しているのでした。それを見て、虔十は口を大きく開けて笑

いました。

ある日、村の平二がやってきて、杉の背丈は低いのに、自分の畑が日影になるから「杉伐れ」と脅しました。虔十は「伐らない」と顔をあげて言いました。それが虔十の一生でたった一度の「逆らいの言葉」でした。

その秋、チブスが流行り、平二も虔十も死んでしまいました。次の年には鉄道が通り工場ができて、すっかり町になっていきました。しかし虔十の杉林だけは残って、子どもたちは毎日集まりました。あるとき、村を出てアメリカで教授になった博士が帰って来て、講演をした後で杉林を見つけ驚いて言いました。「ああ、ここはすっかりもとの通りだ。あの中に私や私の昔の友達がいないだろうか」。虔十の親は、杉林の土地を売れと言われても「虔十のただ一つのかたみだから」と売らなかったのです。博士は「ああ、全くたれが賢くたれが賢くないかはわかりません」とつぶやき、その提案で杉林は「虔十公園林」と名づけられました。「全く全くこの公園林の杉の黒い立派な緑、さわやかな匂い、夏のすずしい陰、月光色の芝生が、これから何千人の人たちに本当のさいわいが何だかを教えるか数えられませんでした」と結ばれます（『宮澤賢治全集・第六巻』ちくま文庫、所収）。

自然、文化、労働、分ちあい

いのちあるものに価値のないものはない、弱くさせられている存在にこそ大切な意味があることは、かつての連載でもふれた賢治の作品を貫くねがいです。しかしこの童話を読み返し、それだけではないことに気づきました。「本当のさいわい」を求めて生きようとするのが「人間というもの」ではないか、賢治は虔十の姿に託してそのことを書こうとしたのです。

人間は、自然の不思議さ、美しさに魅入らされます。自然が喜んでいると嬉しくなり、自然が苦しそうだと悲しくなります。人間は自然と交感しつつさまざまな生命を養い、その変化、成長によって人間も養われているのです。

人間は、土、光、水をよく見て選び、衣食住の材にするためにいのちを育てます。その日々で感じたこと、イメージしたことを言葉、歌舞、絵画などの芸術として表現しようとします。自然にはたらきかけて、生きるための糧と文化を創造することによって、何にも代えがたい喜びを得ているのです。

そして自然から得た生きる糧、創造した文化を人びとと共有しようとします。その分ちあうための活動や労働が、他者の「さいわい」になることを知ります。人間は、人びとの間に根を下ろして働くことによって、その根から精神のエネルギーを得ているのです。

「本当のさいわい」は、「何のために、如何に生きるか」の答えを探して行く道の先にみえてくるものでしょう。それは人によってさまざまであるはずですが、その深部には賢治が大切に思っていた、自然との交感、文化の創造、労働、分ちあいが、共通のねがいとしてあるのではないでしょうか。そして子どもも、いや無垢な子どもだからこそ、この「本当のさいわい」を求めているのであり、その実現のために自分の潜在的可能性を花開かせていきたいとねがうようになるのです。「本当のさいわい」を求める心は、発達に広がりと豊かさを与えてくれます。

賢治は、『虔十公園林』で平二という虔十のねがいを妨げようとする存在のことを書き、さらに鉄道が通り工場ができることによって、大切なものが失われな